

神との交わりを回復する唯一の道

NTT-OB 福島 勲

神に近い者とされた

私たち日本人の多くは「血」という言葉を好みません。しかし聖書によれば、私たち罪人が神に受け入れられるためには、血が不可欠であることを知ります。

血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはない。(ヘブル9:22)

とあるからです。

神が人の罪を赦す根拠となるものは「血」です。それも罪汚れのないお方の「血」でなければなりません。

驚くべきことに、被害者である神の側から加害者である私たちのところに、罪汚れのない神の御子が与えられました。

人となられた神の御子は、神の義が要求する「血」を流され、人の罪を贖うための「なだめの供え物」となりました(ロマ3:25)。

この結果、イエス・キリストを救い主と信じた私たちは、エペソ2章13節にあるように、以前は神から遠く離れていましたが、キリストの血によって近い者とされ、神と愛の交わりに生きる者とされました。

キリスト者になってからの問題

しかし、なお私たちには問題が起こります。何でしょうか。再び罪を犯すことです。神の恵みにより、常習的に罪を犯すということはなくなりましたが、神の御前に、罪の大小は関係なく、罪は罪です。当然、その罪は神との間に隔離を生じさせ、交わりが失われます。

キリスト者になった当時の私は、その問題を解決すべく考えました。罪滅ぼしの観念です。人に喜ばれる善行に励もう。そうすれば、善行ゆえに、神は罪を赦して下さるだろう。さらに奉仕活動や献金等も試みました。善行や奉仕活動をするとうれしさがあり、内心気持ちが良くなります。これで神様は私の罪を帳消しにして下さった、と勝手に考えました。愚かな私は、あれやこれや、様々な方法を

編み出していたのです。

善行・奉仕活動・感謝献金等が神に喜ばれるものであることは間違いありませんが、罪の贖い代にはなり得ません。神との交わりが途絶えている限り、何をしても内側に真の満足はなく、自分を責め、そして人に対しても不機嫌になり、暗い表情で生きるしかありませんでした。

宗教改革以前のマルチン・ルターは、難行苦行によって罪の赦しを受け、神に近づけると誤解していたようです。

神との交わりを回復する道

こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所に入ることができるのです。（ヘブル10：19）

この聖句は人が神に近づく道を指し示しています。旧約時代の幕屋や神殿の場合は、聖所に入る自由はありませんでした。神に任命された大祭司でさえも、「かつてな時に垂れ幕の内側の聖所に入って……はならない。死ぬことのないためである」（レビ16：2）と警告されていました。

それが、新約時代は、何の肩書きも資格もない「兄弟たち」と呼ばれるすべてのキリスト者が、イエスの血によって、大胆に（模型の聖所ではない）まことの聖所に入ることができるのだ。

私はヘブル書を読み始めた頃、「大胆に」という言葉は「誤訳」ではないかと思いました。キリスト者は罪の赦しにあずかり救われた者とはいえ、なお墮落した肉の性質を持っている。罪を犯すことがしばしばある。このような罪深い私がどうして「大胆にまことの聖所に入ることができる」と言い切れるのか。

聖所に入るには、恐れおののき、心低くし、「この罪深い私をあわれんで下さい」と何度もお願いし、赦しを頂いて初めて入れていただけたのだと考えていたからです。「大胆に」などとはとんでもないと思っていました。

しかし、聖書辞典や注解書等を調べてみますと「大胆に」という訳語に間違いはありません。間違っているのは私の先入観であり、この10章19節に至るまで

の御言葉をよく理解せず、イエスの血に対して、神がご覧になっておられるように、私は見えていなかったのです。

自分の状態や感覚や経験だけで聖書の御言葉を解釈するべきではありません。神がご覧になり評価しておられるように、自分も同じく見て評価すること、それが正しい聖書理解であり信仰なのです。

贖いが十全なものであった結論として

冒頭の「こういうわけですから」は何を受けているのでしょうか。9章11節から10章18節までの説明文ではないでしょうか。

ヘブル書は比較の書。旧約の影と新約の実物（キリスト）を比較させています。ここで、キリストは

やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられたのです。（ヘブル9：12）

とあり、キリストの贖いの御業の完全さ・完璧さが懇切丁寧に説明されています。

人類史上まさに未曾有の代価がイエス・キリストの血によって払われたことが明らかにされています。罪を贖う代価として一点の不足もありません。過去・現在・未来の永遠にわたるあらゆる罪が贖われました。

その御業の帰結として「こういうわけですから」で始まる10章19節があります。このことがハッキリする時、大胆な確信が出て来ます。

なお罪深い私も、自分の善行とか何かによってではなく、ただ「イエスの血によって」神の御前に問題のない者として受け入れられており、「大胆に、まことの聖所に」喜びと感謝を持って入ることができるのです。何と感謝なことでしょう。

まとめ

キリスト者になる前も、なってから後も、神に近づく方法は、「イエスの血によって」です。これ以外の道はありません。キリスト者になってから、罪過ちを犯したとしても、私たちはすでに神の子です。神の子であることを取り消されることはありません（ヨハネ6：37，Ⅰヨハネ2：1-2）。

しかし、そのままでは、神との交わりは絶たれたまま、弱り果てます。あわれな放蕩息子（ルカ15：11-24）のようになりかねません。

自分の罪を認め、告白し、イエスの血を適用する時、感謝なことに、全く問題のない者として受け入れられます。すぐに神との交わりは回復されます（Iヨハネ1：7～9）。

私たちの良心は、イエスの血の価値を示されることによって安らぎを得るのです。何と感謝なことでしょう。

聖歌236番（讃美歌280番と同じメロディ）の第1節と第4節を歌いましょう。

①のぞみはただ主の 血と義にあるのみ



いかでか他のもの たよりとなすべき
（おりかえし）イエスこそ岩なれ 堅固なる岩なれ
ほかは砂地なり



④ラッパの音ひびく日 義の衣まとい
おそれず御前に この身は立つを得ん